

Infolettre de l'AJEQ

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2020 年 春号

第 11 巻第 1 号 (通算 29 号)

2020 年 5 月 31 日発行

ケベックのアニメーションを待ちながら

杉原 賢彦 (目白大学)

ケベックのアニメーション作家として、フレデリック・バック (1924-2013) の名はよく知られていることだろう。旧ドイツ領フランスのザールブリュッケンに生まれ、レンヌで絵画を学び、戦後の 1948 年にひとりの女性に会うためモンレアルに赴いた彼は、そのまま新たな街に居着いてしまう。その後、1952 年にカナダ放送協会に職を得て、番組の背景や科学番組のイラストなどを手がけるようになり、やがて、1968 年に同局のアニメーション部門に異動、アニメーターとして番組製作に携わってゆくことになるのだった。

バックの名が世界に知られたのは、1981 年の『クラック!』がアカデミー賞の短編アニメーション部門で賞を得たことによる。局での仕事のかたわら、コツコツとアニメーションをつくり続けた彼は、1987 年の『木を植えた男』によって、ジャン・ジオノの原作より以上のインパクトをもって世界中の

人々の心をとらえたのだった。

ところでカナダは、国立映画庁 (ONF: Office National du Film) の設立ののち、初代長官のジョン・グリアースンの指揮のもと、戦時下の 1941 年にアニメーション部門が設立され、グリアースンに請われてスコットランド人のノーマン・マクラレン (1914-1987) が同部門の責任者として赴任する。実際、彼の代表作はこの ONF 時代に製作されたものが数多い。実写とストップモーション・アニメーションを巧みに組み合わせた『隣人 (Neighbours)』(1952/アカデミー賞短編映画賞受賞) や、グラフィカルでリズムカルな純粋アニメーション『線と色の即興詩 (Blinkity Blink)』(1955) はまさにこの時期のもの。個人的にもっとも好きな『シンクロミー (Synchrony)』(1971) もそうだ。

マクラレンの功績は、とりもなおさずカナダの地にアニメーションを、それも実験的精神に富んだ、ハリウッドのそれとはま

●本号の内容●

巻頭言 (杉原 賢彦) …1 2019 年度韓国ケベック学会年次大会参加報告 (村石 麻子) …3
ケベック滞在記 (木下 晴美) …6 モンレアルにおけるフィールドワーク (吉田 悠佑) …8
AIEQ (国際ケベック学会) 交流報告 (真田 桂子) …10

まったく性質を異ならせた、描画と音／音楽とのコラボレーションによる表現そのもののおもしろさにあふれたアニメーションを根づかせたことだったと言える。そしてその途上、彼は後進の育成も図り（そのなかにはモンレアル美術学校の学生たちのほか、とりわけ、のちに ONF のフランス語圏アニメーション部門を率いることになるルネ・ジョドワンなどがいた）、今日に続くカナダ・アニメーションの礎を築いたのだった。

余談を飛ばせば、マクラレンは高畑勲監督とも親交があったほか、人形アニメの世界で孤高の世界を拓いた高橋克雄監督にも影響をおよぼした。また、ONF とのコラボ作品もある山村浩二監督の作品クレジットは、マクラレン作品のそれにそっくりだったりする。

フレデリック・バックがフランスからケベックにやって来てアニメーターへの道程をゆっくりと歩み始めた時期と、マクラレンがスコットランドから招かれカナダの地に新たなアニメーションの息吹を根づかせ始めた時期に数年の開きがあるとはいえ、ふたりが同じ時代と場の空気を呼吸していたことに違いはないだろう。

絵画的な絵づくりを基本に、動きを切り詰めて物語をゆったりと語りかけるフレデリック・バックの作風と、「アニメーションは動く絵の芸術ではなく、絵の動きの芸術である」と語り、まるでダンス空間のように絵柄と音楽が交錯してゆくようなマクラレンの作風は、まったく真逆のものに映る。

だが、ふたりの仕事を並行して見てみれば、いずれも新たなアニメーションを拓き、その可能性を広げてゆこうとする賭けのようなものが見えてくる。

ふたつの流れ、ふたつの言葉が並行するカナダとケベック。この地、モンレアルにはアニメーションに特化した映画祭がふたつほど存在する。Les Sommets du Cinéma d'Animation と Montréal International Animation Film Festival - ANIMAZE。ひとつの都市にアニメーションを中心にした映画祭がふたつも存在するのは、きわめて珍しいことだ。ところが、短編アニメーションの盛況ぶりに対し、ハリウッドや日本、そしてフランスと肩を並べるような長編アニメーションは、なかなか現れ出て来てはくれなかったように思う。

フェリクス・デュフル＝ラピエール監督による『新しい街 ヴィル・ヌーヴ (Ville Neuve)』(2018) は、1995 年のレフェランダムを背景に、ひと組の元夫婦の現在と過去が、モノクロームの描画のなかに交錯してゆく、そんなアニメーションだ。

15 年前、1980 年のレフェランダムの失敗



『新しい街 ヴィル・ヌーヴ』より(1)



『新しい街 ヴィル・ヌーヴ』より (2)

の記憶が、壊れてしまった夫婦の記憶と現在を結び合わせるように語られるなか、言語化できない記憶の欠片、想いの碎片が散文詩となって結実する瞬間、ここ、ケベックからでなければ生まれなかったアニメーションが産声を上げる——。

「明日の夜明けに君が見るもの／平原は霧がかかり、物音がしない／地平線はほぼ見えない／一步步踏みしめ気ままに歩く／一歩ごとに思いにふける／孤独や友情、愛情／喪失の囁き……」

ふたつの流れ、ふたつの想いが、この作品のなかで交わり、融合する。その答えは……ない。おそらく、ケベックの人たちがこれから導き出すべきものとして存在しようとしているのだ。このアニメーションのなかで、そしてこれを見た人々の心のなかで。



『新しい街 ヴィル・ヌーヴ』より (3)

日本でもこの秋、公開される予定となっているこの作品、どうか新しい夜明けとともに見られんことを——。



2019 年度 韓国ケベック学会 (ACEQ) 年次大会 (於ソウル) 参加報告

村石 麻子

去る 2019 年 11 月 16 日 (土)、韓国ケベック学会 (Association coréenne des études québécoises) 第 21 回年次大会が、在ソウル・カナダ大使館エントランスホール Scofield Hall にて開催された (共催：国際ケベック学会 (Association internationale des études québécoises) / 在ソウル・ケベック政府機構 (Bureau gouvernemental du Québec à Séoul))。

このたび AJEQ 代表として当学会に参加する機会を頂き、ケベック文学を代表する劇作家ミシェル・トランブレーについて発表を行ってきた。

1. 学会プログラム概要

今年度は「ケベック文学と文化における都市空間 (Espace urbain dans la littérature et la culture québécoise)」というテーマで、5 名の研究者が登壇した。

第 1 部 開会の辞及び ACEQ 総会 / 基調講演

LECLERC Catherine (Univ. McGill), « Créer l'urbanité : micrométropoles littéraires québécoises et franco-canadiennes »

第 2 部・第 3 部 発表 4 点／全体討議

MURAISHI Asako (AJEQ), « Michel Tremblay et l'imaginaire mythique de la Révolution québécoise »

CHOI Hye Lin (Bureau du budget de l'Assemblée Nationale), « L'économie sociale dans les villes québécoises »

KIM Min Chai (Univ. Yonsei), « Des caractéristiques du parler montréalais à travers le rap »

LEE Kaya (Univ. féminine de Sookmyung), « La trajectoire du groupe des études québécoises »

基調講演をされたマギル大学のカトリヌ・ルクレール氏は、ご専門が文学における多言語主義とあって、ケベック文学に描かれる複数の少数民族・文化・言語が遍在・混在・共存する都市空間を、「micrométropoles (ミクロメトロポリス)」という概念を提示して読み解かれていた。様々な葛藤と相克を乗り越え、他者がある



LECLERC 氏ら参加者と

がままに受け容れるケベックの懐の大きさ、ケベックにこそ体现されている多なる一の理想が、文学作品から垣間見える発表であった。

また ACEQ 会員の発表は、韓国のケベック研究史をたどる発表のほか (LEE Kaya 氏)、ケベック諸都市における社会運動と財政問題 (CHOI Hye Jin 氏)、またラップ音楽に見るモンレアルの口語表現についての発表 (KIM Min Chai 氏) など多岐に渡り、コーパスの広さに驚かされた。

とりわけ KIM 氏の発表は、LECLERC 氏の発表にも通ずる内容で、大変興味深かった。ケベックにおける英語のヘゲモニーに着目し、フランス語擁護を貫くナショナリスト的な旧世代と、保守思想を排し *franglais* (フランス語と英語が混交した俗語) をアイデンティティの拠り所にする若者世代とのジェネレーションギャップを浮かび上がらせるもので、ケベックにおける言語をめぐる対立構造について、理解を深めることができた。

私自身は自由論題の枠組みで、60 年代の「静かな革命」を生きたミシェル・トランブレイの代表的小説連作『プラトー・モン・ロワイヤル年代記 (Chroniques du Plateau Mont-Royal)』を扱った。作家がどのように虚構空間に神話を取り入れたかを検証し、政治的アイデンティティの鋳直しの過程で、神話のイマジネーションが共同体の礎として大きな役割を果たすことを証明した。作家が生まれ育ちその小説の舞台にもなった

のは、モンレアルのかつての労働者街 Plateau Mont-Royal。ギリシャ神話の運命の女神パルクや聖書の黙示録など、神話のインスピレーションを受けたトランブレーは、現実の都市空間を壮大な叙事詩へと変貌させ、歴史の過渡期にあって精神的先導者として、フィクションを通じた新たな世界のヴィジョン構築を企図していたのではないか。ケベックの一作家の分析を通じて、因習の彼方に新しい時代を創出するという文学の普遍的な力を示唆できたのではないかと思う。

2. 今回の学会参加所感、ソウル探訪雑感

今回の学会で興味深かったのは、進行形式として、各登壇者に対し ACEQ 会員からそれぞれ対談者兼報告者が割り当てられていたことだ。対談者が発表内容のアウトラインをなぞりつつ登壇者に質問を投げかけるという形を取ることで、問題意識が共有しやすくなり、会場のリアクションも引き出し、活発な議論を促すのに成功していた



大会の様子

のが印象的だった。

こうして知的刺激を大いに受けたのはもちろんのこと、人との出会いもまた、今回の学会参加の収穫であった。LECLERC 氏とは同年代なこともあり、ケベック事情・研究から人生観に至るまで、様々なお話を通じて親睦を深めることができた。またそのお人柄に惹かれた ACEQ 会長の HAN Yong Taek 氏、コーディネーターの PARK Heui Tae 氏をはじめ、会員の方々より温かい歓迎を受け、大変美味しい韓国料理も頂いた。

また市内観光ではソウルの方々に親切に道案内して頂き、方向音痴な私も大変助かった。そして何より王宮巡りで出会ったガイドさんたちの完璧な日本語には感服させられた。チャングムなど日本でも流行した韓流ドラマの逸話も交え王朝の歴史を詳しく説明して下さりととても興味深く、近くて遠い韓国を知るきっかけになった。11 月中旬のソウルは思いのほか冷え込み、さらにはあいにくの雨だったが、そんな寒さを忘れるほどの人々の温かさにふれた旅であった。

今回の学会参加を通じて最も嬉しかったのは、ケベックについて見識を深められたのはもちろん、昨今の複雑な日韓情勢のなか、微力ながらこうしてケベックを橋渡しとして、両国の絆を深める一助となれたことである。学術交流をはじめ、こうした草の根外交を地道に積み重ねていくことで、両国の関係がよりよいものになってゆくことを願ってやまない。

最後に、こうした貴重な機会を下さった AJEQ 会長の立花英裕先生、丹羽卓先生、小倉和子先生、関未玲先生に心より御礼と感謝を申し上げて、報告の結びとしたい。

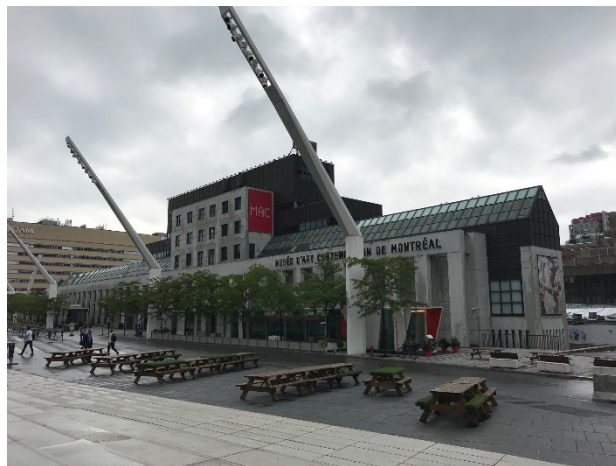
<2019 年度小畑賞調査報告 1>

ケベック滞在記

木下 晴美

2019 年度の小畑ケベック研究奨励賞をいただき、同年 8 月末から 2 週間モントリオールに滞在いたしました。初めての北米滞在中で少々緊張していたのですが、モントリオールや残念ながら 1 日の滞在となってしまったケベックシティでも、皆さんとても親切に接して下さったことが印象に残っています。

今回の研究調査の目的は、美術館の活動を通して「ケベック」現代美術の循環を分析することでしたので、現代美術専門のモントリオール現代美術館 (Musée d'art contemporain de Montréal) で調査が行えたことは幸運でした。受け入れを快諾して下さったのは、同美術館メディアテーク内、コレクション・資料管理部門長であるゼペテッリさんでした。今回の研究調査では、ゼペテッリさんをはじめ、補佐のランティエさんやインターンシップの学生さんに大変お世話になりました。特に補佐のランティエさんは、現地での調査がスムーズに行えるようにとご配慮してくださり、滞在前からメールでやり取りをさせていただいておりました。そして、調査初日には私の関



モントリオール現代美術館

覧したい資料をすべてご用意してくださっていました。また、滞在中はもちろんのこと、滞在後も私が必要とする資料があると迅速に対応してくださいました。いろいろな方々にご協力いただいて研究調査が行えることは幸せなことだと、改めて再確認する機会にもなりました。

滞在中には、アーティストのバイオグラフィーに関する資料、イベントに関する資料、そして、アーカイブスで管理されている資料などを確認し、重要な情報を収集することができました。また、資料研究の他に、2 つのインタビューを行うことができました。キュレーターのボウプレさんとのインタビューでは、コレクションの役割、それぞれの展覧会の目的、作品購入や寄贈について伺うことができました。コレクション・資料管理部門長であるゼペテッリさんとのインタビューでは、コレクションや展覧会の動き、巡回展覧会における他の文化機関とのパートナーシップ、コレクションや展覧会の流布政策について伺うことができまし

た。おふたりともご丁寧にお答えをくださり、興味深い内容のインタビューとなり、とても充実した時間を過ごすことができました。キュレイターのボウプレさんからは、抽象化の問題 (La Question de l'abstraction) というタイトルの展覧会カタログをプレゼントしていただきました。美しく、ページをめくるのが楽しみな展覧会カタログです。

研究の合間には美術館や展覧会に足を運びました。モントリオール現代美術館で印象に残っている展覧会は、「レベッカ・ベルモア展」です。レベッカ・ベルモア (Rebecca Belmore, 1960-) はファースト・ネーションの現代美術家で、作品を通して、アイデンティティ、女性が置かれている状況、先住民への暴力といった問題提起を投げかけています。この展覧会は感情が揺さぶられる内容でした。日本でもベルモアの作品を見る機会に恵まれるといいのですが。モントリオール美術館 (Musée des beaux-arts de Montréal) では、フランス人のファッション・デザイナーである「ティエリー・ミュグレー展」が開催されていて、ティエリー・ミュグレー (Thierry Mugler, 1948-) の独創的な衣装の数々が展示され、多くの人がこの展覧会に訪れていました。ケベックシティにあるケベック美術館では、アルフレッド・ペラン (Alfred Pellán, 1906-1988) やポール・エミール・ボルドゥアス (Paul-Émile Borduas, 1905-1960) など、ケベック州を代表する画家の作品を堪能できました。その他にも、モントリオールのマッコード博物



モントリオール美術館

館やケベックシティの文明博物館など、ケベック州にはたくさんの訪れるべき文化機関が存在していますので、次回は展覧会を巡る旅行ができたと思います。

また、知人が工学高等学院 (École de technologie supérieure) の教授をしているので、そのラボラトリーを訪問しました。聴覚の研究をしているラボラトリーで、聴力を助けるために開発されたイヤホンなどを見ることができました。研究機関と企業が提携しているため、同じ建物内に企業のオフィスもあり、こちらにはコーヒースタンドのためのキッチンが備え付けられているなど、心地よい空間になっていました。ラボラトリーの学生さんは皆さんリラックスした様子で、教授と学生の間の風通しの良さを感じました。

最後に、研究の趣旨を理解し受け入れてくださった、モントリオール現代美術館のゼペッテリさんと補佐のランティエさん、キュレーターのボウプレさんに感謝すると同時に、このような研究の機会を与えてくださった小畑ケベック研究奨励賞へ御礼を申し上げます。

＜2019 年度小畑賞調査報告 2＞

モンREALにおけるフィールドワーク

吉田 悠佑

2019 年 11 月 15 日から 12 月 1 日まで、モンREALにて小畑ケベック研究奨励賞に伴う研究滞在をいたしました。今回は Cadillac 駅から徒歩で 10 分前後のところにある一軒家の地下部屋を Airbnb 経由でお借りしました。今までは現地のお友達と会う以外は常に一人でしたが、今回の滞在では橘木先生がご紹介くださったモンREAL大学の Prévile 先生が何度も会う機会を作ってくださいました。お誘いいただいた中でとりわけ強く印象に残っているのは Maison Saint-Gabriel という歴史博物館で行われた Fête de la Sainte-Catherine というイベントです。ケベック州に入植してきたシスターたちの当時の生活の紹介、寸劇、そして当時の飴を目の前で作り、試食するというものでしたが、全てフランス語のみで行われました。今までの滞在では常に英語がどこかしらで聞こえるような環境でございましたので、このようなフランス語しか聞こえないという環境はケベック州がフランス語の

みを公用語としている州であることを強く感じさせました。

大学の関係では、ケベック大学モンREAL校の神崎先生、そして私の受け入れをしてくださいましたラヴァル大学の Mercier 先生にお世話になりました。神崎先生は担当されている日本語の授業にご招待くださり、授業の前後には私の研究のお話やケベック市までの交通手段などのご助言をくださいました。今まで大学構内に入ったことがございませんので、日本とケベックの大学の共通点や違いを知ることができ、興味深くございました。Mercier 先生はお忙しい中、私のために時間を割いてくださりました。日本では仕入れにくい現在のケベック州のお話や研究に対してのご質問やご批判をくださり、大変良い刺激をいただきました。滞在の半ばではケベック市へ向かいました。AIEQ の事務局に向かう前に Saint-Jean 通りの店舗における言語使用を観察していましたが、英語の使用がほぼ見受けられず、ケベック市とモンREALの違いに驚きを禁じ得ませんでした。



Maison Saint-Gabriel にて

出発の前までは、2019 年度全国大会における Laferrière 氏と立花先生の対談タイトルであった“J’écris comme je voyage”になぞらえて、“Je recherche comme je voyage”をテーマにケベック州の様々な場所で調査をしようと考えておりました。しかし現地の皆様からモンREALの興味深いお話を伺う中でモンREALの「広さ」に気がつき、Uber と STM を使ってモンREAL市内の様々な場所を訪れることにいたしました。Westmount ではまるでオタワにいるかのように英語話者による英語、また英語話者によるフランス語を聞けました。また Parc 駅の周辺ではインドの伝統服やお料理、また言葉が見受けられました。今回のテーマを基にしたフィールドワークの中で、Préville 先生とそのご友人の方々からのおすすめがなければ、モンREALの「複数さ」に気がつくことができなかったと思います。現地の調査は主にお昼過ぎと夜に分けて行なっておりました。お昼過ぎにはフィールドワーク先の下見やカフェの注文時における言語使用の観察をいたしました。店舗の掲示物にある使用言語の調査は店員さんから怪しまれないようにするためにもお店が閉まる夜に行っていました。太陽光のない冬の夜の厳しい寒さで肌の乾燥と耳たぶの痛み、自然と垂れてくる鼻水と戦いながら歩いておりました。時にはホットコーヒーで温まりながら、ちょうど始まったクリスマスの飾り付けやライトアップに心が癒されながら歩いておりました。今となっては雪で滲んでおり、ま

た寒さで手が震えて歪んでいる調査ノート
の文字を見返すのも良い思い出です。

今まで何度もモンREALには滞在してきましたが、このように研究者として正式に調査滞在を行えたことは AJEQ 会員の皆様と AIEQ からのご支援、そして今回お会いした現地の皆様のお力添えがあってこそです。深くお礼を申し上げます。

番外編のお話として、数年ぶりに合衆国経由で日本とケベックの移動をしたのですが、出国をするときにモンREALで合衆国の入国審査をするということを全くもって失念しておりました。飛行機に間に合うように余裕を持ってほぼ寝ずに空港に着いたものの、保安検査の行列を超えた先にあった入国審査の長蛇の列を見た時の絶望は未



Mile End 地区で見かけたライトアップ

だに忘れられません。残念ながら、わずかに数分足りずに飛行機を逃してしまい、最短でも翌日の便ではないと日本に帰国できないこととなりました。ゲート前での便変更手続きの最中、私と同じように乗り遅れてしまった方々とお話をして、動揺した気持ちを紛らわせておりました。幸運にも友人の家に泊めてもらえたのでよかったものの、合衆国で乗り換えをされる際には皆様どうぞお気をつけください。



<寄稿>

AIEQ (国際ケベック学会) 交流報告

真田 桂子 (阪南大学)

昨年から今年にかけて、国際ケベック学会 (AIEQ) 関係者との交流の機会に恵まれた。まず昨年 8 月末には、モントリオール大学を拠点としたケベックへの研究出張の折に、ケベックシティを訪れ AIEQ の事務所を訪問した。事務所は、ケベックシティの目抜き通りのルネ・レヴェック通りがあり、ケベック州の主な官公庁が入っているビルのなかにあった。約束の時間に事務所を訪問すると、事務局長のシオンタル・ウデさんと秘書のスージー・ボリュールさんがにこやかに迎えてくれた。事務所内には、世界各国で出版されたケベック関連の書籍が山のように積み上げられており、まさにケベック研究を世界に推進する拠点であるこ



AIEQ のウデ事務局長 (左) およびボリュール秘書 (右) と

とがひしひしと伝わってきた。ウデさんは日本ケベック学会 (AJEQ) の活動を高く評価しており、今後も協力を惜しまないと約束してくれた。また、立花会長らとの共訳でちょうど 7 月に出版されたばかりの『ケベック詩選集』を持参したところ、ケベックでは詩人は特別な存在で、ケベック人の魂を表しているともいえる 36 人もの詩人の作品が日本語に訳されたことは本当に意義深い、ととても喜んで下さった。ウデさんとスージーさんが、詩選集の目次のフランス語の詩人名をたどりながら、この作家も、この作家も入っていると目を輝かせながら談笑していたのがとても印象的であった。その後、事務所の近くの、ホテルコンコルドケベックの最上階にある有名な回転展望レストランでランチまでごちそうになり、ケベックシティを眺望する目の覚めるような絶景と美味しい料理でもてなしていただいた。



ホテルコンコルド最上階からシャトー・フロントナックそしてセントローレンス川を望む

今年の 1 月末には、現 AIEQ 会長のクロード・オセー氏と大阪でお会いする機会に恵まれた。オセー氏はスイス人で、スイスやケベックなど、主にフランス語圏の比較文化史がご専門だということであった。また大変興味深いことに、今年 1 月には大阪大学の客員研究員として 1 か月ほど日本に滞在し、第二次世界大戦中に日本とスイスの文化交流に尽力したあるスイス人外交官についての調査研究を行っているとのことだった。一方、オセー氏はスイス人らしく山岳地帯に関心があり、日本の滞在中にも



AIEQ 会長のオセー氏と
(阪南大学あべのハルカスキャンパスにて)

信州の日本アルプスをはじめ、北は北海道から南は鹿児島までいくつもの山岳地帯を訪れたと話してくれた。このように AIEQ の会長が、思いがけず日本の歴史や自然に深い関心を寄せてくれていることに驚き、大変嬉しい思いであった。その後、オセー氏をあべのハルカスの日本レストランにご招待し、ランチをご一緒しながら AIEQ の活動についてもご報告した。短い時間ではあったが話は尽きず、オセー氏からも今後ますます AIEQ の活動が発展するよう協力したいと励ましの言葉を頂き大変有意義な時間をすごすことができた。

●編集後記●

遅くなりましたが、ニュースレター春号をお届けします。2020 年に入り、COVID-19 と命名された新型コロナウイルスが世界中で猛威をふるい、ケベックでも 5 月 29 日時点で感染者の累計が 5 万を超え、4 千名あまりの死者が出ています。そうしたなかで、4 月 29 日付の *Le Devoir* そして *The Gazette* がモントリオールの名物書店 *Olivieri* の閉店を報じています。今度ケベックに行けるのはいつの日か、まるで見通せませんが、なじみの店の多くが営業を続けていることをただ願うのみです。

第 11 巻に入った今号より、ケベックでも定着してきた *Infolettre* にタイトルを変更しました。引き続きご愛読をお願いいたします。(T)

AJEQ ニュースレター

年 3 回発行

発行人：立花英裕 編集人：大石太郎